

特集

目 面 灵 仙 !



▲カレンフェルトの尾根道をたどる登山者

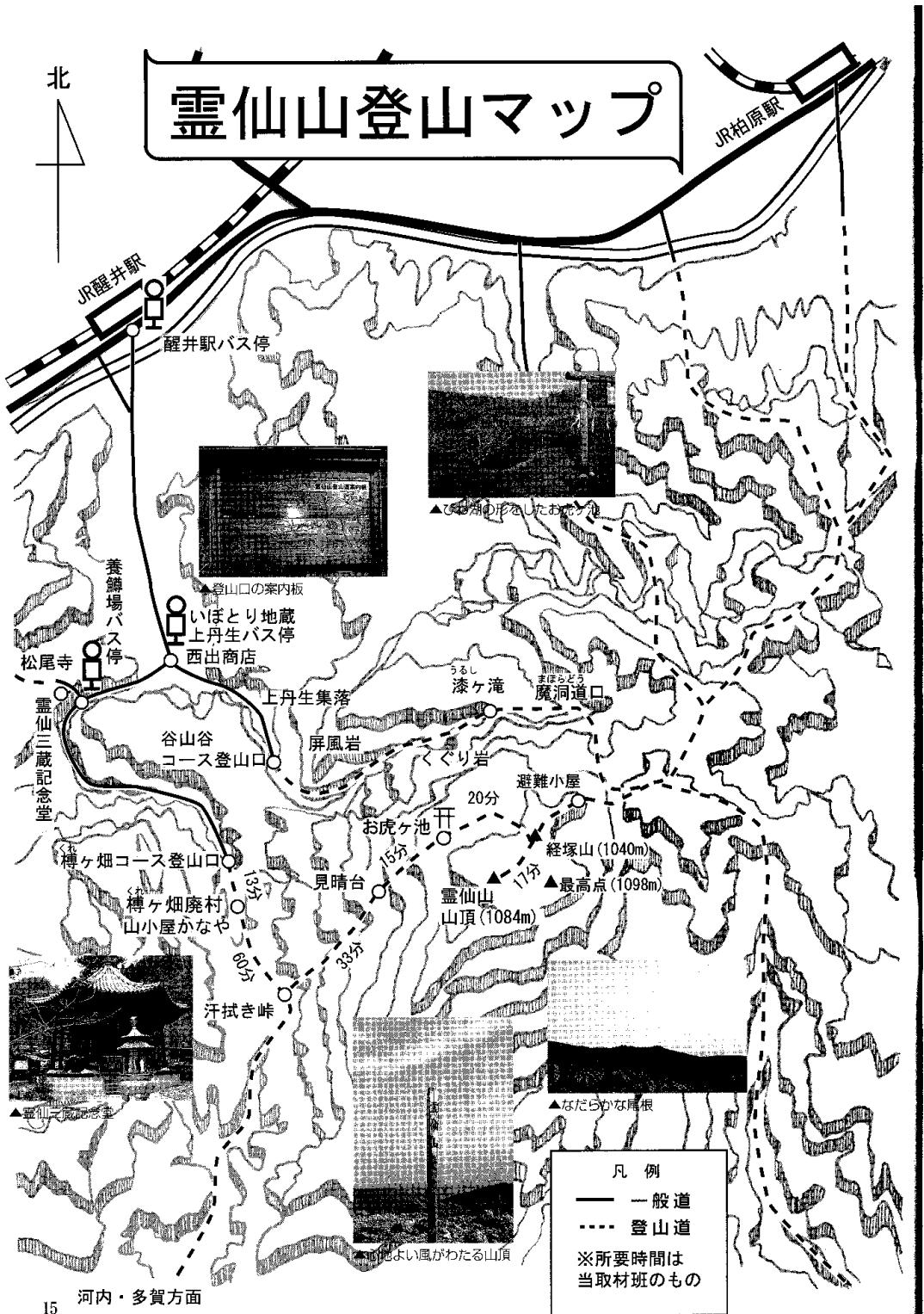
北近江の南端、お隣三重県との境をなす鈴鹿山系の北端に位置する靈仙山は、
千メートルを超す秀麗な山容の山だが、伊吹山ほど人々に知られていない。
だが、山好きな人にとっては、たいそう惹かれるモノのある山、
何度も登りたくなる山だという。
また、山岳信仰の靈場として、
北近江の歴史や文化に大きな影響をもたらしてきた。

この特集では、
靈仙という重々しい名の山のもつ魅力、
靈仙とともに暮らす人びと、
ふもとの集落・上丹生のことなどを紹介しよう。

*本誌においては、地名、池沼名などは、基本的に通称名で記しました。
*靈仙山の3つの頂については諸説がありますが、取材記事においては一般的に言われる説を探りました。



▲峰の連なる靈仙山を描いた「靈仙寺の古図」(森望さん所蔵)



(一〇九八m)への登頂は、次回のお楽しみに取つておくこととした。

お虎ヶ池のアクシデント

我があやしい五人組のほか、晚秋の靈仙山頂は実際に様々な人たちで賑わっている。子どもたちも大勢いたのだが、中でも元気が良いのは、やはり熟年グループだ。特に女性のパワーはすごい。山頂でも「一生青春」って感じのトーケーが繰り広げられている。

お弁当を広げると取材班のメンバーにも自然と笑顔がこぼれる。アニさん隊長はお弁当を作つてもらえないで、携帯コンロで湯を沸かしてカップラーメンを作つている。今日に限らず、これがアニさんの山の昼食の定番らしい。ちびっ子たちが興味深げに覗き込む。山頂のパノラマを堪能し午後一時前には下



特に水深を測定する場合には…。

そして、お虎ヶ池での事件は起つた。

登りでも少し紹介したが、お虎ヶ池は琵琶湖の形をした、なぜか涸れることのない不思議な池である。いつたいどのくらいの深さがあるのだろう？

とらんちゃん、持参のステッキを水面に突き刺してみると、ズボズボ；

と沈んでいく。何とその底は一メートル余りの柔らかい泥に覆われていたのだ。要するに底なし沼状態なのである。はまると恐いよな

「あ」と思ついたら、ちびっ子隊員たちも先

を争つて水面にステッキを差して底泥の感触を楽しみ始めた。こうちやん隊員に続いてゆ

うちやん隊員がトライした次の瞬間だった。池の境目に気付かなかつたゆうちゃん、哀れ

踏み出した右足は底なし沼の中へ…。危険を察知したらんちゃんが必死で抱え上げてくれ

たお陰で、右足（膝上）沈没だけ助かつたのが不幸中の幸いであった。みなさん、くれ

ぐれもお虎ヶ池の周辺にはお気をつけ下さい。

さて、運動不足の上、登りで体力を消耗した一部の隊員たちにとつては、そこからの下りも結構キツい。ゆうちゃん隊員はさらに濡れで冷たく重い靴とスボンに少々バテ気味。

紅葉の盛りまであと一息、色づき始めた木々も隊員たちの目にはあまり入らない。登山口まで下りてきた時には、短い晩秋の陽が翳り始めていた。時計の針は三時半を回つていった。みんな、よく頑張った！

ドライブウェイが通じ、観光地化している伊吹山とは違つて、山本来の素の魅力が靈仙には残されている（22ページで中井くんも言つているが）。里に近いのにひつそりと、きちんと整備されているがさりげなく、それでいて今も暮らしのすぐそばにある靈仙の魅力を、隊員全員が再発見した山行でありた。

（みわのぶひこ）